The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロシア語の受け身が描く世界 : 主語と動作主項をめぐって
Author(s)	林田, 理恵
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2011, 6, p. 37-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6950
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ロシア語の受け身が描く世界
― 主語と動作主項をめぐって ―

林　田　理　惠*
HAYASHIDA Rie

Abstract :

The World Depicted by the Russian Passive Voice: On the Subject and Agentive Arguments

In this paper, the active voice of changing the word order and passive voice of participle form with the function of the aorist statements in Russian will be analyzed to clarify the principle of differentiation of the passive aorist and the motivation for the formation of passives. The syntactical role of the subject and agentive arguments and the essence of the functions of meaning about both sentences will be studied upon. Focusing on two different forms of syntax patterns, we analyzed the principle of representation of those differences relating to the principal's perspective at the level of narrative text, the following results were obtained. 1) The central axis point object in the macro expansion story, if it is a central figure as a base, the aorist passive is formed by motivation of the operation to maintain the central axis of the subject. 2) The marked active transitive word order "OVS" sentences is led to the focus of agentive and the effect to introduction to the text of new event and person. The "VS" sentences of statement about things in unmarked order indicate the presence of things and a person, and bring the same effect of introducing the text of things and a person. Meanwhile, the direct object at the head of sentence plays a role to maintain the cohesion in the micro context.

Keywords : Russian passive voice, aorist, subject, agentive argument, narrative perspective
キーワード：ロシア語受動文，アオリスト，主語，動作主項，語りのパースペクティヴ

＊　大阪大学大学院言語文化研究科・教授

1．ロシア語受動文の基本特徴

現代ロシア語において「受動」という形式が選択される際の差異化原理とは ―― この形式が使われるとき，どのような表現意図と機能が求められているのか，林田 [1999]，林田 [2000] で受動文の歴史的形成，変遷過程をたどりながら，以下のような点について明らかにしてきた。

(1) i) 分詞形受動文の形式を担う -н- / -т- 形分詞は，他動性を基軸とするヴォイス・カテゴリーとは無関係に，「動作・作用の結果，達成された状態」という本来的な意味でのパーフェクト機能を表現する形式として存在してきた。
ii) 現代ロシア語の分詞形受動文も，それまでの -н- / -т- 形分詞の歴史的な意義を直接継承し，「過去の動作・作用の結果としての現在の状態」を基本的意味としている。
iii) 非情名詞を主語とする文が最も典型的である。
iv) 造格によって動作主が表示される例は稀であり，動作主表示をもたない 2 項受動文が高い頻度をもつ。

Не надо! Это же подарено всем нам.　«Сны»
（ばか者，これは仲間みんなで頂戴した品だ。）
Иркутский острог расположен на правом равнинном берегу Ангары.　«Сны»
（イルクーツクの柵はアンガラ川右岸の平地にある。）

(2) i) 再帰形受動文は，「主体内に留まる動作・作用や変化の過程」を表現する，中動的意義をもつ -ся 形動詞の意味的拡張によってもたらされたものであり，特定の語彙的・統語的環境の下でのみ中動的意義の個別的「価値」として受動の意味が実現される。
ii) 現代ロシア語再帰形受動文は，受動カテゴリーを表現する文法的手段としてはきわめて不安定なものであり，不完了体動詞の全体系には相関していない。そこでは，動作・作用の過程そのものではなく，主として習慣的事実とそれを通じての事物や状況の一般的状態，恒常的属性という内容が表現される。
iii) 1･2 人称主語をもつ再帰動詞構文の場合，少数の受動の意味のみをもつ再帰動詞を除いて受動の意味は表現されない。

В поселке продавались и самые лучшие из камчатских соболей.　«Сны»
（聚落ではカムチャツカで獲れる最も良質の貂が売買されていた。）
Медаль считалась высшей наградой для людей не дворянского происхождения. «Сны»
（勲章は平民の賜るものでは最高のものとされていた。）

このようにロシア語では，受動文の多くが能動文とは異なる事態を描く表現形式として存在する。受動化に対して一連の形態的，統語的，意味的制限があることも考慮すれば，従来

の「主体―客体関係の統語構造上における配置転換」という説明が，受動化の動機づけファクターはもとより，ロシア語受動文の本質的特徴について何も語り得ていないことは明らかである。

さらに林田 [2001]，林田 [2005] では，ロシア語分詞形受動文における状態受動文，動作受動文のアスペクト的意味・機能を中心に考察した。その分析結果に基づいて，客体の主題化，動作主の非焦点化等，同様の機能をもつとされる受動文と不定人称文を，特にアスペクト的意味・機能の異なりという点に注目して比較検討し，次の諸点を明らかにした。

(3) i) ロシア語分詞形受動文は，パーフェクトというアスペクト的意味をその表現形式の本来的意味として示す形式であり，従来，アオリスト機能としてのみとらえられてきた動作受動文過去・未来時制においても，アオリスト機能に比べてパーフェクト機能が優勢となる。

ii) 完了体動詞では逆に，パーフェクト的意味は一定の語彙的条件，文・テクスト環境，発話状況の支えによってのみ表現可能であり，アオリスト機能が優勢となる。

iii) 動作受動文と不定人称他動詞文はアオリスト，動作パーフェクト，さらにテクスト機能としてのパーフェクトの逆行用法といったアスペクト的意味，及び，そこから派生した諸機能においても重なりをみせる。しかしながら，それぞれの意味・機能が現れるその頻度において明らかな差異が観察され，動作受動文はパーフェクト的意味への，不定人称他動詞文はアオリスト的意味への際立った偏りをみせる。

iv) 同じパーフェクトとしての機能を表現する場合でも，動作受動文と不定人称他動詞文ではその表現力に差異がみられる。動作受動文では，発話時点の事態に対する根拠・判断材料として過去の動作を導入するという，パーフェクト本来の機能が表現される場合が多いのに対し，不定人称他動詞文では，そのパーフェクトは先行の時間局面の出来事への単なる一時的な逆行というテクスト機能として使用されることが多い。

― Это решит генерал-губернатор Пиль, он в Иркутске. Ему уже направлен <u>императорский</u> указ.　«Сны»　受動文－動作パーフェクト・判断根拠

（「それは，イルクーツク駐在の総督が取り決めることである。すでに総督ピーリには勅令が<u>降されている</u>」）

Родителей Медведя <u>перевели</u> куда-то по работе, они уехали из Москвы, и Медведь уехал с ними, а Манюня очень плохо учился, его <u>выгнали</u> из школы, он попал в «лесную школу», оттуда сбежал, связался с блатнымм и во время войны сидел по уголовным делам в лагере.

«Дом»　不定人称文－アオリスト用法

（メドヴェージの両親は<u>転勤になり</u>、モスクワを去った。メドヴェージも両親のあとについていった。マニューニャは，成績が悪く，<u>放校され</u>,「少年院」に入れられ，そして，そこから逃げだし，不良仲間と関係を持つようになり，戦時中は刑法に触れ収容所にいた。）

― Как могло случиться, что это прошение дошло до нас так поздно, хотя и было отправлено очень давно? «Сны» 受動文－動作パーフェクト・判断根拠
（「この者の帰国の願いはずいぶん前に送られたものと思うが，いかにして耳にはいらざりしや」）

В доме, где некогда поселили прибывших в Иркутск японцев, теперь жили только Синдзо и Исокити. Кодаю предоставили другой, более обширный дом там же, на Ушаковке. «Сны» 不定人称文－パーフェクト逆行用法
（イルクーツクの土を初めて踏んだとき以来，ずっと日本の漂流民たちが住んでいた宿舎には，今は新蔵と磯吉が起居し，光太夫は官から与えられた同じウシャコフ地区の別の宿舎に移っていた。）

分析形パーフェクト（быти 動詞の現在形と能動過去分詞である -л 分詞の合成形式）が，アスペクト・カテゴリーの発達に伴って過去形一般の形式へ転換したものとしてのロシア語動詞過去時制の形式。

本来，動詞派生形容詞的な状態指標であったもの [Добрев 1982 : 172-173] [石田 1998 : 46] が，状態パーフェクト－動作パーフェクト－アオリストという一連の意味を次第に獲得して形成されたロシア語分詞形受動文。

2 つの表現形式はそこに同様の変遷をみることができるが，現代ロシア語では，完了体動詞過去時制は基本的機能としてすでにアオリスト的な過去へ大きくシフトしており，パーフェクトの本来的機能は部分的に残存しているという段階にあるといえる。

一方，分詞形受動文は，状態パーフェクトをその意味の中心環として明確に維持しつつ，動作パーフェクトへのシフトをもみせながら，アオリスト的過去へと部分的なゆれをみせているといえよう。そしてこの変遷過程の軸上での，現代ロシア語における両形式のスタンスの異なりが，まさに動作受動文と不定人称他動詞文という 2 つの構文の並存を許す一つの要因となって，パーフェクト機能の顕現化という受動化形成動機の明確なファクターを作り出しているのである。

さて，以上の議論の過程では，アオリスト機能をもつ動作受動文 —— 以下，アオリスト受動文 —— 形成動機のファクター解明という課題がいまだ積み残しにされている。本稿ではその解明への手がかりとして，分詞形受動文における主語および動作主項の構文上の役割，意味機能の本質を明らかにしていく。

文頭に直接補語が位置する語順転換された能動文が存在するロシア語にあって，このような能動文と受動文は同じく客体の主題化機能を担う文法手段とされる。本稿では，①動作主が主語のまま文末に置かれ，客体が直接補語のまま文頭位置を占める語順転換能動文，②動作主は間接補語として文末に置かれ，客体が主語昇格して文頭位置を占める受動文，という

2形式の構文パターンの異なり[1]に着目し，テクストレベルにおける語りの主体の視点，パースペクティヴとの関わりでそれら表現形式の差異化原理を探っていきたい[2]。

以下，アオリスト受動文そのものの分析に移る前に，まず状態受動文で動作主項がどのような構文上の役割，意味機能をもっているかについて概観してみよう。

２．状態受動文における動作主項

ロシア語では状態受動文は状態パーフェクトの専用形式として機能し，何らかの動作の結果もたらされた客体における変化結果の継続状態を表す [Исаченко 1960 : 365] [Храковский 1991 : 163-164] [Шелякин 1989 : 200] [林田 1999 : 120]。

状態受動，動作受動それぞれの統語構造・テクスト環境の差異については，すでに以下のような点を明らかにしてきた [林田 2001 : 73, 78]。

(4) i) 時点・場所を表す状況語，従属節等は，状態受動では客体における動作の結果状態が存在する時点・場所を，動作受動では動作の成立の時点・場所を表す。

ii) 持続期間や反復性（「いつも」「毎日」等）を表す状況語，従属節は状態受動とのみ共起し，動作受動とは共起しない。

iii) 様態を表す状況語は，状態受動では変化した客体の外観や質，構成等を表し，動作受動では動作がどのように行われたかを表す。

iv) とりつけ動詞，位置変化動詞から作られた分詞形受動文に場所の状況語が共起する場合は，状態受動の意味となる。

Это произошло спустя тридцать с лишним лет после того, как в Петербурге в 1705 году была открыта школа японского языка.　«Сны»

動作受動－動作成立の時点を表す状況語（‐‐‐‐‐部は受動タイプを決定する状況語，以下同）

---

1 周知のように，ロシア語における「文法的主語」は主格という明確な形態的指標を持つ統語的カテゴリーである。これに対し，「話し手の意識としての「表現上の断続関係」－ すなわち，話し手の話題に関しての方向づけ －」[林田 1996 : 73] を担う主題－論述構造が問題となる際には，多くの場合，文頭位置を占める名詞句等が主題を担うと考えられる。文法的主語が使用されない複数タイプの非人称構文が存在し，表現上の断続関係や情報構造に依存して語順を転換させるロシア語にあって，主題を担う名詞句等と文法的主語は明確に区別される。従来，同じ客体の主題化機能としてとらえられてきた受動文と OVS 語順の他動詞能動文であるが，受動文では本来の客体が補語から「文法的主語」に昇格しているのに対し，OVS 語順能動文では語順転換という操作で客体が文頭位置に置かれるにとどまり，主題と考えられる文頭位置の客体は統語的には補語のままである。詳しくは [林田 1996] を参照のこと。

2 本稿ではアオリスト受動文が主な考察対象であるため，分析データをこの構文が多く観察される書きことばに絞っている。話しことばにおける受動文形成動機は，おそらくかなりの程度，書きことばとは様相を異にしていると予想される。

（日本語学校の前身とも言うべきものがペテルブルグに開設されたのが一七〇五年であるから，それからこの時までに三十余年の歳月が流れている。）

Крематорий уже полтора года был закрыт. «Дом»

状態受動－持続期間を表す状況語 （この火葬場はすでに半年 閉鎖されていた。）

Мы навещали Антона в его темноватой квартире на первом этаже, ... , где всегда было включено радио, ... «Дом» 状態受動－反復性を表す状況語

（アントンを見舞いにみんなで，一階にある彼の部屋にいった。… 部屋ではいつも ラジオがかけっぱなしになっていて，…）

... , враг был раздавлен вкупе с бандитами, ... «Дом»

動作受動－動作様態を表す状況語

（… その男は，匪賊の一味もろとも あの世送りになった。）

Государственные учреждения не очень отличались от частных домов, там и сям были прорыты каналы шириной не менее чем десять кэн, соединявшиеся с Невой. «Сны» 状態受動－外観修飾の状況語

（官庁も民家もさして差異はなく，街路の真中には幅十間ほどの 掘割が掘ってあって，ネワの水を引いて用水とし，…）

-- В этой комнате собрано все, что вами найдено? «Сны»

状態受動－場所の状況語を伴う位置変化動詞派生の受動文

（「あなたが初めて見付けたものは，みなこの部屋に 並べられてあるか」）

(5) i) 完了体動詞過去時制の連続によって，出来事の継起的展開が述べられるテクスト環境内では，受動文はその継起的展開の連鎖の一環として，点としての出来事 —— 動作受動の意味を表すことになる。

ii) 不完了体動詞や形容詞述語文等によって，事物や状況の静止的な状態が描写されているテクスト環境内の受動文は，その描写の一部を表す状態受動文として機能することになる。

В середине августа Кодаю было приказано явиться в канцелярию. Он поспешно собрался, предполагая, что получена наконец долгожданная весть из столицы. Но приказ пришел совершенно неожиданный. «Сны» 動作受動－出来事展開

（八月の中頃, 光太夫は役所から出頭を命じられた。いよいよ都から沙汰があったのだと，光太夫は意気込んで出掛けて行ったが，沙汰は沙汰でも，思いがけない沙汰であった。）

В Брускове был дом, безалаберный, почти развалившийся, с подгнившим крыльцом, с недостроенным вторым этажом, где окна были забиты фанерой, ... «Дом»

状態受動－静止的描写

（ブルスコヴォの別荘といえばたしかに満足な姿をとどめていず，廃屋に一歩一歩近づいていた。玄関の昇降口は下の方が腐っていた。二階の建て増しは中途半端で放棄され，

窓にはベニヤ板がうちつけてあった。）

さて，造格による動作主項が存在する場合，動作受動文としての理解が一般的であるが [Коновалова 1978 : 69] [Буланин 1986 : 80]，以下の例のように，(4), (5) で見た差異化条件によって明らかに状態受動の読みをもつ受動文で，動作主項の存在が観察される。

(6) -- Постель должна быть где-то там, -- полковник показывает на нишу над дверью, похожую на деревенские полати. Туда, в эту нишу, и заталкивает Кузьма фуфайку, потому что его полка обтянута белым и положить на нее фуфайку нельзя.　«Деньги»

（「寝具一式は，どこかその辺りにあるはずだ」大佐は，扉の上にある田舎の農家の天井寝床に似た壁の凹みを指した。クジマは，この凹みに綿入れジャンパーを押し込んだ。というのも，彼の寝台は真白いシーツに ぴったり被われていたので，そこにジャンパーを置くわけにはいかなかったのだ。）

(7) ... Работая, она всегда была окружена облаком табачного дыма (ей единственной Кравцов разрешал курить на кафедре) и казалась со стороны этаким канцелярским заводом со своим оборудованием -- папками, скрепками, дыроколами. ...　«Кафедра»

（… 仕事中彼女はいつも煙草の煙の雲に 包まれていて（クラフツォフ・ミハイロヴナに学科で喫煙を許されていたのは彼女だけであった），脇からみると自分の設備 —— ファイル，クリップ，穴抜き —— を有する事務工場のように見えた。）

(8)　Философствуя обо всем этом, поскольку в партшколе когда-то кое-что слышал о классических учениях, сидя за столом рядом с женой, от которой, казалось бы, трудно укрыть мысли, успевая кивать и поддакивать соседям в общем разговоре, Тансыкбаев восхищался втайне тем, как чудесно устроен человек. Вот, к примеру, он сидит в компании, в званых гостях, делает вид, будто целиком и полностью поглощен значимостью этого момента, а сам думает совершенно о другом.　«Белое облако»

（かつて党学校で古典的な教義の講義を聞いたことの名残かもしれないが，こういったことすべてについて思索にふけりながら，妻と並んですわり，妻には心の裏すらも隠すことができないことを感じつつ，タンスィクバーエフはその場の共通の会話に加わって，うなずいたり，隣の人たちに相槌を打ったりしながら，人間がいかにすばらしいものであるかということに心底から驚き，心ひそかに感嘆していた。たとえば，彼は招待客の一人として大勢の仲間とともにすわり，この祝賀の意義深さに身も心も感動しているようなふりをしているが，自身はまったく別のことを考えているのである。）

(6), (7) における動作主項は本来の意味での動作主を意味しておらず，主語名詞句の継続的状態を表示するための不可欠の構成物として理解できる。すでに林田 [2000 : 18-27] でも述べたが，ロシア語史において -н- / -т- 形過去分詞は，「動作の過程そのものを不活性化し，動作主的要素とは無関係に，客体における動作結果状態を表現する」ことをその中心的な機能として維持してきた形式である。(6), (7) はそのような分詞形受動文の典型的な意味・機能をもつ例である。従って，そこでの造格補語（＿＿部分，以下の例文でも同じ）は先行研究でも指摘されているように [Данков 1981 : 95-108]，その格表示の本来的な意味である「道具，手段」表示を逸脱するものではなく，そこにメタファー的な意義拡張は認められない。

一方, (8) の述語 поглощен は意味的に再帰動詞 поглотиться（夢中になる）に対応している。ロシア語の -н- / -т- 形述語のうち，(8) の例のように再帰動詞を中心とした非他動詞に相関するものはかなりの数に上る。こういった述語は主語自身の質的変化，感情変化，自己自身への動作などの結果状態を表し，そこに何らかの外在的な作用，動作主の存在は見い出し得ないのである。(8) の造格補語も「意志性をもつ動作主」という動作主項の本来的意義から遠く外れ，感情状態の「原因，源」としての意味役割を担っていることがわかる。

３．アオリスト受動文

すでに述べたように，動作受動文は動作パーフェクトとアオリストという 2 つのアスペクト機能をもつ可能性がある。動作パーフェクトとして理解される受動文の場合は (3) iii), iv) で見たように，そのアスペクト機能において他動詞能動文とは明らかな差異がみられ，その異なりが受動文形成動機のファクターとなっている。

一方，アオリスト受動文については，語順転換された他動詞能動文との差異化原理はいまだ明らかにされていない。以下，①語順転換他動詞能動文②アオリスト受動文という 2 つの構文パターンの異なりに焦点を当て，特に語りの主体の視点，パースペクティヴ，テクスト機能という観点から考察してみたい。

まず，パーフェクトの場合と異なり，述語がアオリスト機能をもつ場合，語りの主体の視点位置は出来事時点へと移動している。完了体過去の連続的使用では，出来事の逐次展開のありさまが客観的な視点で描かれる。出来事内部の詳細は問わず，俯瞰的な眺めで徹底的な外部記述が行われる。受動文であっても，述語がアオリスト的意味で使われる際には語りの主体の視点位置や記述スタンスは，基本的には能動文と変わらない。

ある動作主の存在があり，そこからの実際的なエネルギーの流れによって客体に対する働きかけがなされるとき，周知のように人間の自然な認知のありようとして，一般には動作主を中心とした構文 —— すなわち他動詞能動文としてその事態が描かれる。そこでは語りの主体の主観はあたかも排除されているかのように，事態の自然な描写がなされるのである。

他方，アオリスト機能がもたらす視点位置，外部記述というスタンスは同じであっても，受動文の場合は語りの主体の主観フィルターがかかっている。事態の中心は語りの主体の恣意的な判断によって動作主から客体へと移され, 客体よりの視点で事態の推移が描写される。

(9)　Колонна тронулась. Совершенно больной и даже постаревший поэт не более чем через две минуты входил на веранду Грибоедова. Она уже опустела. В углу допивала какая-то компания, и в центре ее суетился знакомый конферансье в тюбетейке и с бокалом “Абрау” в руке.

Рюхин, обремененный полотенцами, был встречен Арчибальдом Арчибальдовичем очень приветливо и тотчас избавлен от проклятых тряпок. Не будь Рюхин так истерзан в клинике и на грузовике, он, наверно, получил бы удовольствие, рассказывая о том, как все было в лечебнице, и украшая этот рассказ выдуманными подробностями. Но сейчас ему было не до того, а кроме того, как ни мало был наблюдателен Рюхин, -- теперь, после пытки в грузовике, он впервые остро вгляделся в лицо пирата и понял, что тот хоть и задает вопросы о Бездомном и даже восклицает “Ай-яй-яй!”, но, по сути дела, совершенно равнодушен к судьбе Бездомного и ничуть его не жалеет. ...　　«Мастер»

（渋滞した車の列は動き始めた。すっかり病人めいて，そのうえ，少し老けこんだようにさえ見えた詩人は，二分も経たないうちに，グリボエードフのテラスに入った。そこはもうがらんとしていた。隅のほうで何人かのものが酒を飲み終えようとしていたが，そのまんなかで，トルコ帽をかぶり，≪アブラウ≫を注いだグラスを片手にはしゃぎまわっているのは，顔見知りの司会者だった。

山のような布巾を抱えてレストランに入っていったリューヒンは，アルチバリド・アルチバリドヴィチから大変愛想よく歓迎され，すぐに呪わしいぼろ布から解放された。

もしも病院の中で，また帰りのトラックの上で，あれほどの苦悩を味わわなかったならば，おそらくリューヒンは，病院で起こった一部始終を，それに尾鰭までつけて語り聞かせて，大いに満足したにちがいない。しかし，今の彼はそれどころではなかったし，それに，いかに見る目がないとはいえ，トラックでの呵責を経験したいま，海賊の顔に鋭い視線をちらりとくれただけで，相手がベズドームヌイのことをあれやこれや質問しようが，「それは気の毒に！」と叫びさえしても，ほんとうのところ，ベズドームヌイの運命に対してはまったく無関心で，彼のことを少しも同情していないのを理解したのである。…）

(10)　Короткое пребывание Маргариты под вербами ознаменовалось одним эпизодом. В воздухе раздался свист, и черное тело, явно промахнувшись, обрушилось в воду. Через несколько мгновений перед Маргаритой предстал тот самый толстяк-бакенбардист, что так неудачно представился на том берегу. Он успел, по-видимому, смотаться на Енисей, ибо был во фрачном наряде, но мокр с головы до ног. Коньяк подвел его вторично: высаживаясь, он все-таки угодил в воду. Но улыбки своей он не утратил и в этом печальном случае, и был смеющеюся Маргаритой допущен к руке.　　«Мастер»

（マルガリータが柳の木の下にほんの短い時間とどまっていたときに起こった一つのエピ

ソードは，注目すべきものであった。口笛が空中に鳴り響くと，明らかに目標を見誤ったものらしく，黒い物体が水中に墜落したのである。ほどなくして，マルガリータの前についさきほど向う岸で，ぶざまな初対面をした例の頬ひげのふとった男が現われた。その男はどうやらエニセイ河にうまく引き返せたものらしく，燕尾服を着用していたが，頭のてっぺんから足の爪先までずぶ濡れになっていた。またしてもコニャックのせいか，彼は着陸しようとして，やはりうっかり水中に飛び込んでしまったのである。しかし，この悲しむべき状況にあっても，彼は持前の微笑を失わず，笑いを浮かべたマルガリータに手に接吻することを許されたのだった。）

(9) では「поэт = Рюхин 詩人リューヒン（____部分）」の視点から，リューヒンの動きに合わせる形で事態の推移が描かれていることがよくわかる。それはさらには内的な心理描写となって，あたかも語りの主体がリューヒンと一体化したかのような演出効果がもたらされている。

また (10) においては，まず「толстяк-бакенбардист 頬ひげの男（-----部分）」の登場が描出され，それを受けた「он 彼（____部分）」の性格づけ文が続く。そしてその延長上に，受動文によって「彼」に起こった事態が「彼」よりの視点で展開されるのである。「в этом печальном случае この悲しむべき状況」，「допущен 許された」という表現が，とりもなおさず彼の心的状態からの描写であることを物語っている。

(9), (10) の受動文に見る主語機能のありようは，受動文の主要な機能を主題化機能 ―― 客体をテーマづけを担う主語として主題化する ―― や動作主の非焦点化機能に見る従来の理解 [Halliday 1967 : 217, 1968 : 205] [Lyons 1971] [Shibatani 1985]，さらには Kuno & Kaburaki [1977]，久野 [1978] におけるエンパシーに基づく説明の根拠となるものであろう。

４．語順転換能動文の機能

ロシア語では主語と直接補語の語順転換に文法的な制約はなく，直接補語－文頭，主語－文末という語順の能動文がそれぞれの文脈，状況に即応する形で使われる。そして，この語順転換文における文頭位置の直接補語について，発話の出発点として主題化された客体を見るという理解が一方で存在する。そうすると，客体の主題化という同じ機能を複数の言語手段が担うことになり，これらの言語手段がいかなる動機づけによって差異化されているのかが問題となるのである。

分詞形受動文は主語の状態変化を，対応する完了体他動詞能動文は動的な行為を描いているとすることで，その差異化を見出す論もあるが [3]，能動文でもし客体が主題化されているのであれば，やはりそこでは客体よりの視点で事態が描かれていると理解しなければならな

3 人見 [2011] ではこれらの 2 構文について，「なる（状態の変化）」的視点で描くか「する（場所の変化）」的視点で描くかの違いであるという指摘がなされている。また，テーマの結束性機能も出るとされているが，そのような機能を直接補語が文頭位置に立つ語順転換された他動詞能動文がどうして担うことができないのかは，残念ながら明らかにされていない。

い。客体よりの視点からエネルギーの流れを描くとは，結局のところ客体の状態変化として事態が認識されているということに他ならなくなり，そこに分詞形受動文における事態認知の枠組みとの異なりを見ることはできなくなる。

(11)　Грянули. И славно грянули. Клетчатый, действительно, понимал свое дело. Допели первый куплет. Тут регент извинился, сказал: “Я на минутку” -- и... изчез. Думали, что он действительно вернется через минутку. Но прошло и десять минут, а его нету. Радость охватила филиальцев -- сбежал.

И вдруг как-то сами собой запели второй куплет, всех повел за собой Косарчук, у которого, может быть, и не было абсолютного слуха, но был довольно приятный высокий тенор. Спели. Регента нету! Двинулись по своим местам, но не успели сесть, как, против своего желания, запели. Остановить, -- но не тут-то было. Помолчат минуты три и опять грянут. Помолчат -- грянут! Тут сообразили, что беда. Заведующий заперся у себя в кабинете от сраму.　«Мастер»

（歌声がとどろいた。それもみごとにとどろいた。確かに，格子縞の男は自分の仕事をよくわきまえていた。第一節が最後まで歌われた。そこで，昔の聖歌隊長は，「ちょっと一分だけ失礼します！」とすまなそうに言い，それから … 姿を消した。確かに一分後に，彼はもどってくるものと誰もが思っていた。しかし十分過ぎても，もどってこなかった。支部の人々は，さては逃げ出したな，と思って喜んだ。

それが突然，どういうわけかひとりでに第二節が歌われはじめ，みんなをリードしたのは，おそらく絶対音感はなかったようだが，かなり気持のよい高いテノールの持主であるコサルチュークだった。歌は終わった。昔の聖歌隊長はまだ戻ってこない。みんなはそれぞれ自分の席に戻ったが，しかし席につくや否や自分の意志に反して歌いはじめた。押しとどめるすべもなかった。しばらく沈黙があると，歌が始まるのである。ここにいたって，大変なことになったと気づいた。支部長は恥ずかしさのあまり自室に鍵をかけて，閉じこもった。）

(12)　И вот тут прорвало начисто, и со всех сторон на сцену пошли женщины. В общем возбужденном говоре, смешках и вздохах послышался мужской голос: “Я не позволю тебе!” -- и женский: “Деспот и мещанин, не ломайте мне руку!” Женщины исчезали за занавеской, оставляли там свои платья и выходили в новых. На табуретках с золочеными ножками сидел целый ряд дам, энергично топая в ковер заново обутыми ногами. Фагот становился на колени, орудовал роговой надевалкой, кот, изнемогая под грудами сумочек и туфель, таскался от витрины к табуретам и обратно, девица с изуродованной шеей то появлялась, то исчезала и дошла до того, что уж полностью стала тарахтеть по-французски, и удивительно было то, что ее с полуслова понимали все женщины, даже те из них, что не знали ни одного французского слова.

Общее изумление вызвал мужчина, затесавшийся на сцену. Он объявил, что у супруги его грипп и что он поэтому просит передать ей что-нибудь через него. В доказательство же того, что он действительно женат, гражданин был готов предъявить паспорт. Заявление заботливого мужа было встречено хохотом, Фагот проорал, что верит, как самому себе, и без паспорта, и вручил гражданину две пары шелковых чулок, кот от себя добавил футлярчик с помадой. «Мастер»

（そしてこのとき，ついに我慢できなくなった女たちが，四方から舞台にどっと殺到した。興奮の坩堝と化した劇場全体にどよめく話し声，忍び笑い，ため息にまじって，「わしは許さんぞ！」という男の声，つづいて，「わからず屋の俗物，手を放して！」という女の声が上がった。女たちはカーテンの後ろに消え，今まで来ていたドレスを脱ぎ捨て，新しいのを身につけて出てきた。金メッキをほどこした脚のついた腰かけにずらりと並んですわっている女たちは，新しく履きかえた靴で力まかせに絨毯を踏み鳴らしていた。ファゴットは跪き，角製の靴べらで靴を履かせ，猫のほうはハンドバッグや靴を山のように抱え，ふうふう言いながら，ショーケースと腰かけのあいだを何度となく往復し，首筋に傷のある若い女は，現れたかと思うと姿を消し，いまやもっぱらフランス語だけでまくしたてていたが，驚いたことに，女たちは一人残らず，それこそ，フランス語など一言も知らない者たちまでも，彼女が口を開くや，たちどころに理解できたのであった。

観客一同を驚かせたのは 突然，舞台に駆けのぼってきた一人の男だった。その男は，妻がインフルエンザにかかってこれなかったので，妻のかわりに，なにかもらうわけにはゆかないか，と言った。実際に妻帯者であることを証明するために，パスポートを見せようとまでした。この思いやりのある夫の申し出は，満場の爆笑をもって迎えられ，ファゴットは，パスポートなど見せなくても信用できる，と叫んで，絹のストッキングを二足，男に渡し，猫は猫で，口紅のケースを一個，つけ加えた。）

(11), (12) の下線部は，いずれも完了体他動詞能動文が語順転換された文である[4]。(11) の文末位置の主語（____部分）はこの文で新しく導入された登場人物を表示しており，一文の中でこの名詞句だけが際立ちを与えられている。(12) の下線部においても同様の現象が観察される。と同時に，(12) では文末主語が際立ちを得ることによって，新しい登場人物の出現が読み手に印象づけられ，その指示対象が後続する物語展開の主題としてのステータスを得ていることがわかる。こうした事実から，このような有標構造の語順転換文が使用される最

4 不完了体他動詞能動文の受動化は一般には再帰形受動文が対応するとされる。しかしながら (2) ii) でも見たように，不完了体能動文の多くは，統語的・意味的制限によって再帰形受動文によって受動化し得ない。したがって，不完了体能動文の語順転換操作が受動化機能をもつ可能性も考えられる。本稿では分詞形受動文を考察対象としているので，ここでの分析は完了体能動文に限っているが，今後の課題として語順転換操作における機能とアスペクト機能との相関性を見ていく必要があろう。

大の動機は，文末位置における主語の有標の焦点化にあるということがまず確認できよう。

そして，動作主としての主語が焦点化され，最重要の情報として際立ちを与えられているのであれば，そこでの事態におけるエネルギーの流れの方向は，動作主からのものとして描かれていることは明らかである。

主題－論述構造の観点から言えば，(11), (12) の文の表現上の切れ目は文末主語の直前にある。

всех повел за собой ／ Косарчук, у которого ...

Общее изумление вызвал ／ мужчина, затесавшийся на сцену.

すなわち，主語を表示する名詞句以外の，直接補語＋動詞述語を含む部分全体が主題となっており，直接補語は (9), (10) で見た受動文の主語のように独立した主題としてのステータスを得ていない。

また，以下の (13) の下線部は「удар 雷鳴（____部分）」の出現を述べる事象伝達文である。事象の出現・存在をひとまとまりに切れ目なく伝える文として，VS を無標の語順としている。

(13)　Гроза, о которой говорил Воланд, уже скоплялась на горизонте. Черная туча поднялась на западе и до половины отрезала солнце. Потом она накрыла его целиком. На террасе посвежело. Еще через некоторое время стало темно.

Эта тьма, пришедшая с запада, накрыла громадный город. Исчезли мосты, дворцы. Все пропало, как будто этого никогда не было на свете. Через все небо пробежала одна огненная нитка. Потом город потряс удар. Он повторился, и началась гроза. Воланд перестал быть видим во мгле.　«Мастер»

（ヴォランドの語っていた雷雨は，すでに地平線の上に近づきつつあった。黒い雨雲が西の空にせりあがり，太陽を半分ほど隠した。間もなく太陽はすっかり隠れてしまった。テラスの上が涼しくなった。ほどなくして，暗くなった。

闇が西の方から押し寄せてき，巨大な都市をおおいつくした。橋が消え，宮殿が消えた。すべてのものが，あたかもこの世に存在していなかったかのように消え失せた。空を断ち切るように一筋の稲光が走った。それにつづいて，都市を 雷鳴が 揺るがせた。雷鳴はくり返され，雨が降りはじめた。雷雨の靄につつまれて，ヴォランドの姿は見えなくなった。）

(13) では動詞の前に置かれた直接補語は客体というよりも，むしろ事象生起の場として機能しており，広義の存在文として述語動詞の実質的な意味も希薄化している。新しい事象出現の描写が，やはり (11), (12) と同様に次の文における主題交替効果をもたらしているのである。

５．アオリスト受動文における主語と動作主項

４で見た語順転換能動文とは対照的に，(9), (10) のアオリスト受動文では，動作主の文末位置は本来の無標の位置である。(11) － (13) でのように有標の焦点化を受けているわけでもなく，新たに出現した事物を表現しているわけでもない。あくまで主語を中心とした事態展開に付随する構成要素として，補足的な役割を果たしているにすぎない。

また，先の (9) や次の (14) の下線部で，アオリスト受動文の主語は後続文でも変わらず主題として維持され，(11) － (13) でのように焦点化による主題交替という現象は起こっていない。こういった事情も，これらアオリスト受動文における動作主補語のステータスのありようを物語っている。

(14) Мне, как говорят газетчики, довелось побеседовать со стариком, который уже один раз умер. То есть находился в состоянии клинической смерти и <u>был из нее выведен</u> <u>бригадой реаниматоров</u>. Старик, наш институтский столяр, пьяница и халтурщик, после клинической смерти был точно таким же, как до нее. Его давно собирались уволить за пьянство, но теперь как-то стеснялись: все-таки умер человек. После смерти он стал практически неуязвим и работать перестал окончательно. На днях он пришел к нам в лабораторию и потребовал, чтобы ему дали “фильтор”.

-- Зачем вам фильтр, Иван Трофимович? -- поинтересовался я.

-- Прогонять политуру. Я се, поди, за всю жизнь три цистерны выпил, а теперь, после клинической, опасаюсь.

-- А как вы себя после этого чувствуете? -- спросил я с естественным любопытством.

-- Хорошо чувствую, -- сказал он уверенно. -- Раз помирал, да не помер, век буду жить. Так я снохе и заявил. ... «Кафедра»

（新聞記者みたいだが，わしは一度死んだ老人と対話することになったことがある。つまり臨床的に死の状態にあり，<u>蘇生チームによって</u>，<u>その状態から引き戻されたのだ</u>。うちの大学の指物師で，臨床的に一度死んだ後も，その前とまったく変るところがなかった。酔っぱらいを理由に長いこと解雇されそうだったが，今では解雇まではされないが，やはりこの人間は死んでしまった。死んで初めて彼は事実上嘲笑なぞ気にせぬ人間になり，働くことも完全にやめたのである。先日彼が我々の実験室にやってきて，≪フィルター≫をくれと言った。

「フィルターをどうするのかね，イワン・トロフィーモヴィチ？」――私は尋ねた。

「ニスをこしたいんですがね。私は一生の間におそらく，タンクローリー三台分は飲んでしまったが，今じゃ臨床死のあとでは怖いですよ」

「その後の気分はどうかね？」―― わしは自然な好奇心から聞いた。

「気分はいいですよ ―― 彼はきっぱりと言った ―― 一度死にかかって死ななかったんだから長生きします。そう嫁にも言ってやりました。…」）

さらに，よりマクロな物語展開という観点からとらえると，アオリスト受動文での主語の役割が一層，鮮明に浮かび上がってくる。

(9) における受動文の主語である「поэт = Рюхин 詩人リューヒン」はこの章の冒頭に登場し，その後，数段落に亘って物語展開の中心的役割を与えられ，(9) の文章へとつながっている。そこには単なるテクストの結束性ということを超えて，語りの主体による物語構成のアングルを読み取ることができる。すなわち，特定登場人物を中心に，一貫したアングルによって出来事の推移が複数の文に亘って描写されるとき，その視点中心軸は主語化という文法手段によって実現されるという傾向が読み取れるのである。また，このような特定登場人物を視点中心軸とした物語構成では, 脇役の登場人物や事物等に一時的にスポットが当たるときに, 語りの主体の視点は物語の中心的役割を担う登場人物と一体化して，その人物の視点で場面が描出されるという現象が起こる場合があり，その特定登場人物が物語構成の拠点の役割をも担う。

主語を文末位置にもつ能動文は，すでに述べたように動作主の焦点化，または新たな事物・出来事の出現描写という本質的に異なる機能をもつ。そして，焦点化によってある指示対象に際立ちを与えることで，テクスト上での主題交替効果がもたらされる。

表現上の断続関係という観点からのみ主題－論述構造をとらえるのであれば，(11), (12) のような有標の語順転換文では直接補語＋動詞述語が，(13) に見るような事象伝達文では直接補語が主題に該当することになる [5]。ただし，そこでの主題はアオリスト受動文における主語のような機能をもってはいない。(11), (13) においては，主題部分が先行文脈での既出名詞句を受けることでテクストの結束性を作り出している。一方，(12) では新しい事態が主題として唐突に冒頭に持ち込まれ，そこにさらに新しい登場人物を導入することで劇的な場面転換の効果を出している。

従来，ロシア語の語順配列には情報構造上の変化が影響を与え，旧情報－新情報という語順配列が実現されるとされてきた。主題－論述構造と情報構造は同一視できないということはすでに林田 [1996 : 72-76] で述べた。また情報の新旧ということが，単に聞き手・読み手にとっての既知／未知という次元でとらえられるものではないという点も，これまでに複数の研究において指摘されている [Chafe 1970 : 210, 1976 : 30-32] [久野 1973 : 217] [安井 1978 : 182-185] [高見・久野 2006 : 185-189]。

他動詞能動文での無標の基本語順は，事象を引き起こすエネルギー源である動作主を統語上の中心的要素として主語化し，文頭位置に置く SVO 語順である。そこに談話をとりまく様々な要素 —— 先行談話における既出情報との関係，聞き手の意識における情報度等 ——

5　これらの直接補語等を主題とみなすかどうかには，主題をどのように規定するかという問題が関係してくる。堀川 [2009 : 76] では，尾上 [1995] における「典型的な題目語」は「後続部分の説明対象」でなければならないという指摘を受けて，「「北海道からはジャガイモが届いた」の下線部は後続部分の説明の対象になっているモノではないので典型的な主題とはいいにくい」という記述がみられる。また，澤田・中川 [2004] では，主題成分が後続の述部と格関係をもつ「アーギュメント主題」，後続の文の述部に対してある範囲を設定する「ドメイン主題」という 2 つのタイプの主題が論じられている。

が介在することで軌道修正が行われ，時に有標の OVS 語順配列文が得られる。

特に物語においては，ストーリー展開，また演出効果を出すための一つの仕かけとして語順配列が使われる。有標の OVS 文の場合も，動作主の焦点化を仕かけとして後続文での主題交替が準備されるのであるが，主題部分では多くの場合，先行文脈における事物や出来事が，新たな事態到来の枠づけの役割で配置され，物語の自然な流れを作っている。

(13) のような事象伝達文では，VS 配列を無標語順として新たな事物・出来事の出現，存在が描写されるが，主題が文頭に置かれる場合には，やはりテクストの結束性の役割を担っていると考えられる。

したがって，OVS 語順の他動詞能動文における主題とアオリスト受動文における主語は，テクスト構成機能という点で本質的に異なった役割を担っていると言えるであろう。
語りの主体がある人物を中心軸としたアングルで，時にその人物と一体化した視点で複数の文・段落に亘って物語を展開していく際，その中心軸，拠点表示は主語化という文法手段に頼らざるを得ないのである。そして，その中心軸としての登場人物が外から作用を受ける場合に，アオリスト受動文形成の動機が成立すると言える。

他方，OVS 語順能動文の主題にそのような視点中心軸としての役割は与えられていない。より局所的な前後の文脈上の結束性手段として用いられており，益岡 [2004] で提起されている「談話・テクスト主題」ともいうべき機能が観察されるのである [益岡 2004:5-6]。

(15) -- Кстати, -- осведомился Бегемот, просовывая свою круглую голову через дыру в решетке, -- что это они делают на веранде?

-- Обедают, -- объяснил Коровьев, -- добавлю к этому, дорогой мой, что здесь очень недурной и недорогой ресторан. А я, между тем, как и всякий турист перед дальнейшим путешествием, испытываю желание закусить и выпить большую ледяную кружку пива.

-- И я тоже, -- ответил Бегемот, и оба негодяя зашагали по асфальтовой дорожке под липами прямо к веранде не чуявшего беды ресторана.

Бледная и скучающая гражданка в белых носочках и белом же беретике с хвостиком сидела на венском стуле у входа на веранду с угла, там, где в зелени трельяжа было устроено входное отверстие. Перед нею на простом кухонном столе лежала толстая конторского типа книга, в которую гражданка, неизвестно для каких причин, записывала входящих в ресторан. Этой именно гражданкой и были остановлены Коровьев и Бегемот.

«Мастер»

(「それはそうと」柵の隙間に丸い頭を突っ込みながら，ベゲモートはたずねた。「あのテラスではなにをしているのだ？」
「食事をしているのだよ」とコロヴィヨフは説明した。「一言つけ加えるなら，いいかい，きみ，ここのレストランはなかなか結構なのだ，値段も高くないときているし。そういえば，長い旅に出る前に誰もがそうするように，おれもなにかつまんで，大ジョッキで冷た

いビールをぐいとひっかけたい気分だな」
「おれもそうだ」とベゲモートは答え，二人の悪党は，菩提樹の下のアスファルトの小道を歩きだし，災厄などなにも予感していないレストランのテラスに向かった。
　白いソックスに，やはり白い房飾りのついたベレー帽をかぶった顔色のさえない女が，四つ目垣の緑のあいだにつくられた隙間にあって，テラスに通ずる入口の片隅の曲木細工の椅子に退屈そうにすわっていた。彼女の前のごく普通の台所用のテーブルには分厚い帳面があり，どういうわけか，レストランに人が入ってくるたびに彼女は帳面に何かを記入していた。まさにこの女にコロヴィヨフとベゲモートも呼びとめられたのだった。）

(15) では下線部のアオリスト受動文が語順転換されている。文頭に置かれた造格で表示された動作主項は直前文脈で話題になっている人物を受け，場面のつなぎの役割をしている。一方，文末の受動文主語が指示する「Коровьев и Бегемот コロヴィヨフとベゲモート」は，章全体の主人公として物語の視点中心軸の役割を担っている。と同時にこの文では主語が有標の焦点化を受けているのである。
　まず，主人公「コロヴィヨフとベゲモート（____部分)」のやり取りが描写されている。次に彼らがレストランのテラスへと移動する動きに伴って，テラスの前に展開する情景が「コロヴィヨフとベゲモート」の目に映るアングルで描き出される。そして，その情景内で登場した人物の「гражданка 女（〰〰部分)」をつなぎとして，読者の前に再び「コロヴィヨフとベゲモート」が登場するという効果が有標の語順転換によって仕かけられているのである。これまで述べてきた主語化と語順転換のテクスト構成上における役割の違いということが (15) では見事に浮き彫りにされていると言えるであろう。

６．まとめ

　以上，アオリスト受動文と OVS 語順の他動詞能動文形成の動機，その機能をテクスト構成上にそれぞれが果たす役割という観点で考察してきた。それぞれの機能をまとめると以下のようになるであろう。

【アオリスト受動文】
客体がマクロな物語展開において視点中心軸，拠点となる中心人物である場合に，主語化操作でその中心軸の一貫性を保つ。

【OVS 語順他動詞能動文】
i)　有標語順文は動作主の焦点化とそれによる新しい事態，人物のテクストへの導入効果をもたらす。事象伝達文は VS 無標語順で事物・人物の存在，出現を表示し，そのことで同じくそれら事物・人物のテクスト導入効果をもたらす。
ii)　文頭位置の直接目的語はミクロな前後の文脈での結束性を保つ役割を果たす。

受動文が行政文書や科学論文など，客観的な事実を表す場面で多く用いられるということがこれまでにも再三，指摘されてきた [二枝 2003：101]。そこでは，動作主を明示しないことで「責任・原因の所在を消去」し，「客観的な表現を実現する」[東郷 1994：294] といった説明がなされる。確かにすでに述べたように，受動文の多くが動作主項を持たず，その場合にはこのような説明も可能である。が，一方で，本稿で考察したように動作主項をもつ受動文が存在し，その場合に「動作主を明示しない」という理由は成り立たない。

特定事物・事態を叙述の中心環におき，それらを拠点としたテクスト上での揺らぎの無い視点位置の一貫性 —— 行政文書や科学論文などで要請されるこのようなテクスト構成機能も，実は受動文使用の強力な動機となっていることを見逃すことはできない。

また，文構造に反映される図／地関係は，「新情報を構成する部分は図，旧情報を構成する部分は地」，「断定されている部分は図，前提とされている部分は地」[山梨 1995：14] とされてきた。これまで考察してきた受動文での主語化と能動文での語順転換という文法上の操作，構文の異なりは，このような単なる図／地という対立では捉えきれない語りの主体の事態把握のスタンス，テクスト構成の仕かけが反映していると言えるであろう。

アオリスト受動文において，客体を「主語」化するという現象がいかなるファクターに影響されて起こってくるのか，マクロなテクスト分析を手がかりとすることで新たな事実が浮かび上がってきた。今回，検討対象とはしなかったアオリスト機能をもつ不定人称他動詞文とアオリスト受動文との差異化原理，また，書きことばとは異なる様相を取るであろうと予想される会話分析を手がかりとした考察など，今後の課題としたい。

（本研究の実施にあたり，大阪大学研究支援員制度の支援を受けた。）

【参考文献】

Bulanin, L.L., 1986, *Kategorija zaloga v sovremennom russkom jazyke*. L.

Chafe, W.L., 1970, *Meaning and the Structure of Language*, Chicago, The University of Chicago Press.

—— 1976, Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and point of view, *Subject and Topic*, New York, Academic Press, pp. 27-55.

Dobrev, I.D., 1982, *Starob"lgarska grammatika: Teorija na osnovite*, Sofija.（石田修一訳『古代ブルガリア文法（語幹論）』大阪外国語大学学術研究双書 8）

Dankov, V.N., 1981, *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka: Vyraženie zalogovych otnošenij u glagola*. M.

Halliday, M.A.K., 1967, Notes on transitivity and theme in English, Part 2, *Journal of Linguistics* 3, pp. 199-244.

Halliday, M.A.K., 1968, Notes on transitivity and theme in English, Part 3, *Journal of Linguistics* 3, pp. 179-215.

林田理惠 , 1996,「ロシア語における「 主語 」と「主題」そして「 主体 」について－ (1) 序論 」『大

阪外国語大学論集』16, 大阪外国語大学 , pp. 61-95.
—— 1999,「ロシア語受動構文の意味と機能」,『ロシア・東欧研究』3, 大阪外国語大学ヨーロッパ I 講座 , pp. 103-142.
—— 2000,「ロシア語における「 主語 」と「主題」そして「 主体 」についてー (3) 受動構文」,『大阪外国語大学論集』22, 大阪外国語大学 , pp. 15-53.
—— 2001,「ロシア語受動構文と不定人称文」,『ロシア・東欧研究』5, 大阪外国語大学ヨーロッパ I 講座 , pp. 71-117.
—— 2005,「第 3 部ロシア語のヴォイス」『ロシア語のアスペクトとヴォイスーことばの生成と解体の場でー』博士論文（神戸市外国語大学）, pp. 178-287.
人見友章 , 2011,「ロシア語のヴォイスー「分詞型受動構文」の分析を中心にしてー」, 大阪大学大学院言語文化研究科修士論文 .
堀川智也 , 2009,「主題として機能する格助詞表示の名詞句 」,『大阪大学世界言語研究センター論集』1, 大阪大学世界言語研究センター , pp 75-88.
Isačenko, A.V., 1960, Grammatičeskij stroj russkogo jazyka v sopostavlenii s slovackim. Č. II, Bratislava.
石田修一 , 1998,「内容類型学と個別言語学の接点ー最近の研究に見るロシア語「態」の研究ー」,『ロシア・東欧研究』2, 大阪外国語大学ヨーロッパ I 講座 , pp.29-54.
Konovalova, L.I., 1978, Formy akcional′nogo i statal′nogo passiva v trechčlennych konstrukcijach, *Voprosy formirovanija grammatičeskogo stroja russkogo jazyka*, Kazan′, pp. 49-69.
久野暲 , 1973,『日本文法研究』, 大修館書店 .
—— 1978,『談話の文法』, 大修館書店 .
Kuno, S. and E. Kaburaki, 1977, Empathy and Syntax, *Linguistic Inquiry* 8, pp. 627-672.
Lyons, J., 1971, *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge University Press.
益岡隆志 , 2004,「日本語の主題 」,『主題の対照』, くろしお出版 , pp. 3-17.
二枝美津子 , 2003,「被動者ー主語文の認知言語学的分析 」,『認知言語学論考』3, ひつじ書房 , pp. 93-146.
尾上圭介 , 1995,「「は」の意味分化の論理ー題目提示と対比 」,『言語』vol. 24, 11, pp. 28-37.
Shibatani, M., 1985, Passives and related constructions: A prototype analysis, *Language* 61, pp.821-848.
澤田浩子・中川正之 , 2004,「中国語における語順と主題化ー主題化とその周辺の概念を中心にー」,『主題の対照』, くろしお出版 , pp. 19-42.
東郷雄二 , 1994,「受動態と非人称の transitivity system ー日仏対照研究へ向けてー」,『日仏対照研究論集』, 日仏語対照研究会 , pp. 288-306.
山梨正明 , 1995,『認知文法論』, ひつじ書房 .
Šeljakin, M.A., 1989, Glagol, *Sovremennyj russkij jazyk*. M., pp. 131-229.
Chrakovskij, V.S., 1991, Passivnye konstrukcii, *Teorija funkcional'noj grammatiki: Personal'nost', Zalogovost',* SPb, pp. 141-180.

安井稔 , 1978,『新しい聞き手の文法』, 大修館書店 .

【例文出典】

Айтматов, Ч. *Белое облако Чингисхана*. Знамя. 1990. № 8. «Белое облако»
アイトマートフ , Ch. 『チンギス・ハンの白い雲』（飯田平和訳）潮出版社 , 1991.
Булгаков, М. *Мастер и Маргарита*. М., 1988. «Мастер»
ブルガーコフ , M.『巨匠とマルガリータ』（水野忠夫訳）集英社 , 1977.
Грекова, И. *Кафедра*. http://lib.ru/ «Кафедра»
グレーコワ , I.『大学教師』（前田勇訳）群像社 , 1988.
井上　　靖 『おろしや国酔夢譚』文春文庫 , 1974.
Иноуэ, Я. *Сны о России*. (Перевод с японского Б.В. Раскина) М., 1980. «Сны»
Распутин, В. *Деньги для Марии*. М., 1984. «Деньги»
ラスプーチン , V.『マリヤのための金』（安岡治子訳）群像社 , 1984.
Трифонов Ю.В. Дом на набережной. М., 1997. «Дом»
トリーフォノフ , Yu. 『川岸の館』（加藤弘作訳）社会思想社 , 1979.

（行末の《 》内は本文中に記載した出典表示を示す。また邦訳については本文中の日本語訳の参考としているが，誤訳，分析に支障のある意訳に関しては適切な内容に随時変更している。）

（2011.06.22 受理）